

櫻川

昭和改訂版
外十

特257

56

30

666

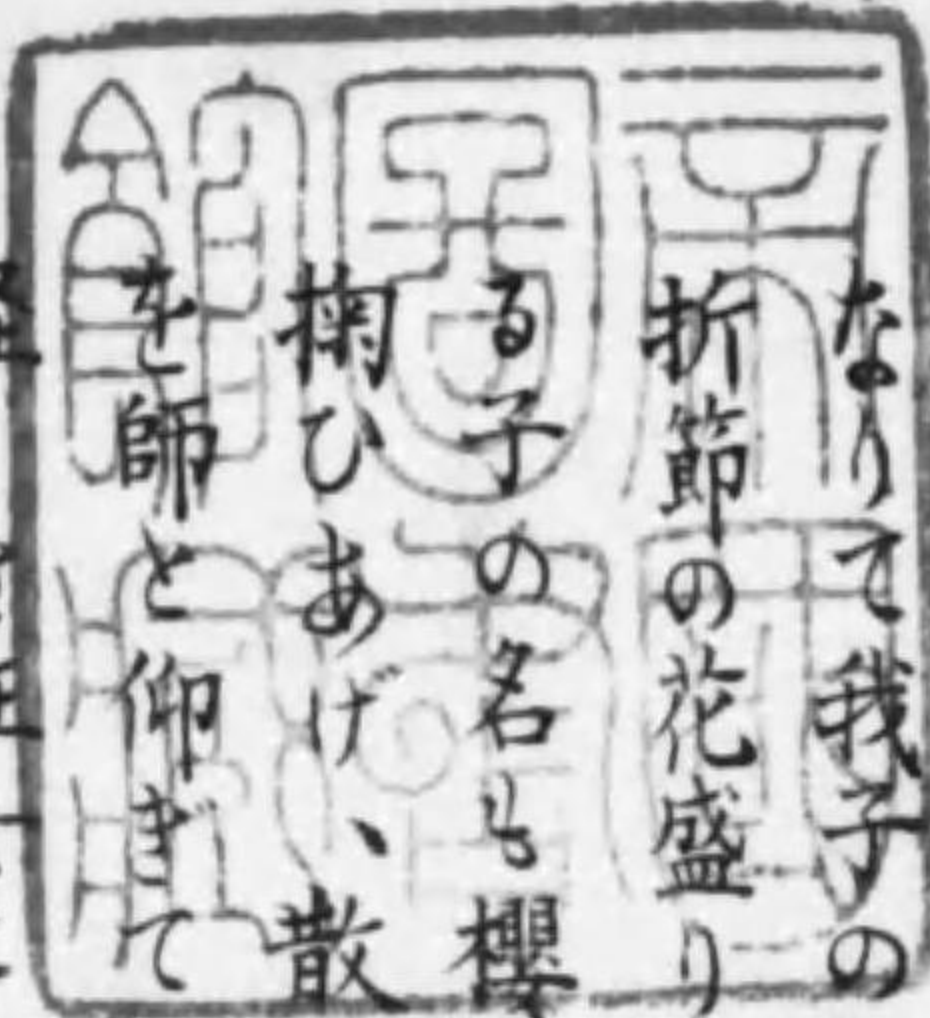


始



櫻川

(梗概) 人商人に買はれし櫻子と言へる幼き者の母、悲歎の餘り狂氣となりて我子のあとを追ひ、常陸の國名高き櫻川のほとりに至りしが、折節の花盛りと言ひ、故郷の氏神は木華開耶姫、川の名は櫻川、尋ぬる子の名も櫻子と、いと由縁の深きを思ひ、掬ひ網を持ち流る、掬ひあげ、散る花と、もふ狂ひめぐりぬ。櫻子今は此國磯辺寺の住職を師と仰きて佛門に入り、師に伴はれて櫻川の花見に罷りしに、其の怪しき狂女こそ生みの母なれば、こゝに再び母子再會の喜びを得てめでたく故郷日向の國へ歸り行きぬ。



シテ	櫻子の母
後シテ	全
子方	櫻子
ワキ	磯部寺住僧
ワキツレ	從僧三人
前ワキ連	人商人
所	前日向國 後常陸國櫻川
季	春

櫻川

^{詞男}是は東國方此、人商人より、^上此は程も
 筑は志日向より、^上此の人を愛ふたて
 け、又きのふ此者程よ、^上程き人をも愛ふと
 しく、^上彼人中、^上されは、^上は父と身の代と
 を、^上櫻乃馬場の病中、^上櫻子此母と尋て

従ふ屋よと信し程よ只今様子此母の
方へとも言ひ世當りまよてあげよ先生と
案内を申しさるるに云い云いには内お
様子此母の口入りり 誰よて渡りゆそ

^男様子の方より文の云い又は代物を様子屋
中せと此云子に云い云い此は後に入様お

屋中に云い云い あつたひよきや先生
文を云いさるに云い梅と云いけ年月
の云い梅の云い梅の云い梅の云い人高
人よ云い云い云い東乃方へ下はあつた
一や云い云い云い云い云い云い云い
物成を今の人と云い云い云い云い

はさるゝにたゞい文をいふてあはれさう

禾^ト是^トを^ト出^ト能^ト乃^ト種^トと^トは^トは^トあ^トま^トう^ト孫^トの

庵^ト一^ト口^トう^トま^トへ^トは^トあ^トれ^トて^ト惜^トう^トゆ^ト

名^ト我^トね^ト一^トい^トな^ト一^トは^トう^トそ^トう^トて^ト母^トも^トあ^トり^ト

る^トい^トん^トま^トあ^トへ^トは^トあ^トれ^トの^トあ^トお^トた^トの^トへ^ト

の^ト一^ト書^ト一^トい^トな^トあ^トれ^トも^トあ^トれ^トん^トが^トい^トた^トい^トと^ト書^ト

あ^トの^トあ^トら^トま^トい^トは^トあ^トれ^トも^トあ^トれ^トん^トが^トい^トた^トい^トと^ト書^ト

へ^トあ^トれ^トの^トい^トは^トあ^トれ^トも^トあ^トれ^トん^トが^トい^トた^トい^トと^ト書^ト

た^トび^トあ^トれ^トも^トあ^トれ^トん^トが^トい^トた^トい^トと^ト書^ト

古^トの^ト今^トの^トあ^トら^トま^トい^トは^トあ^トれ^トも^トあ^トれ^トん^トが^トい^トた^トい^トと^ト書^ト

あ^トの^トあ^トら^トま^トい^トは^トあ^トれ^トも^トあ^トれ^トん^トが^トい^トた^トい^トと^ト書^ト

あ^トの^トあ^トら^トま^トい^トは^トあ^トれ^トも^トあ^トれ^トん^トが^トい^トた^トい^トと^ト書^ト

あ^トの^トあ^トら^トま^トい^トは^トあ^トれ^トも^トあ^トれ^トん^トが^トい^トた^トい^トと^ト書^ト

あ^トの^トあ^トら^トま^トい^トは^トあ^トれ^トも^トあ^トれ^トん^トが^トい^トた^トい^トと^ト書^ト

中入

たのびにゆめはきさるるよころ しませし ちよして

先あすころ〜に注ゆへすて 未いらいあまなる

乃ち人横による花のちりゆりなほなぐい

に成るるまがた まもつねなるい

事 あむむまきれあのをさるるをみも

後 上たちまふるむ乃 まが〜 まぬむ たに

あも あまにふへ あまはらつ あまむ あま あま

た あま あま あま あま あま あま あま

ら あま あま あま あま あま あま あま

ある あま あま あま あま あま あま

此 あま あま あま あま あま あま

る あま あま あま あま あま あま

上日
 ちいさなるはなを吹くわ〜 風はなを吹く心
 づ〜の海を歩いて着舞の海をに出て泳
 ぐは浦又、駿河の海を〜 帯巻とゆうや
 き下あきぬ 実や親子はなるあ〜でい
 はるあはれ様を〜 さいせし 羨よ又々あふ
 むら〜むら〜の機〜 夕〜夕〜の夕夕の夕夕
 日

めいなるぬる子の夕夕と機はなる夕夕の夕夕
 折〜の夕夕の夕夕の夕夕の夕夕の夕夕の夕夕
 夕夕〜の夕夕の夕夕の夕夕の夕夕の夕夕の夕夕
 夕夕まじ〜の夕夕の夕夕の夕夕の夕夕の夕夕の夕夕
 夕夕親と子の夕夕の夕夕の夕夕の夕夕の夕夕の夕夕
 夕夕〜の夕夕の夕夕の夕夕の夕夕の夕夕の夕夕の夕夕
 夕夕の夕夕の夕夕の夕夕の夕夕の夕夕の夕夕の夕夕

あつた親とておあもなれがらうあらん
うたてあきだしそあごまりしてんを
とも今もあななるあな子れあ
なまはらあ
は身のあ里にうへお人づかきあな
筑はあの者あうい 梅何ゆへ左あね

氣とあねあひるぞ まああ
あまはあ道のあうつあまあてあ
ああああああああああああ
ああああああああああああ
ああああああああああああ
ああああああああああああ

類よりくさるるをいふは常葉の國ふ

名も横江 ありとも ありとも 考あり

もまきもいふれは横江く 波れもは

そわなへよひいぬは横江れは花の香も

費ももぬるむ花のいばらのはくも

波ももぬるむ花のいばらのはくも

ヤラハ

の浮遊せうくく水の花実面
きり澄せく あい若止や残はら

下風のして横江よ花の散出いふ

よ一ある事なむは風乃れくある花

あはれきりかぬ流きぬせんよ花まき

心 実るる下風のあはれ楳

小波の海へ 花の白くはる

あき 波のよるをばらうのちる けくしり

あき 雪の 花のよるをばらうのちる けくしり

二入 川風よ 上 ちきいそなをちりく

ちれいそなも横川をうらむるをまて

こ 花の下に海へ ちきいそなをちりく

あき 花の神イロエ 上 水の流れを

あき 月夜に風た

あき 岸花紅き水

あき 洞樹緑の風をくむ 山花

あき 洞氷多いく 洞の

あき 洞の

日

名もあつて一樹乃陰一河也

流きくつとあるたも新くあふあひ

るに橋子のそ又他生れ縁成る

曲 第一年花くつたのりなる水うち

あつて家をあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

しそ^下入^ルを^ルち^ルあ^ルた^ルり^ルし^ルけ^ルて^ルの^ルい^ルな^ル

か^ルめ^ルし^ルら^ルた^ルも^ルき^ル柳^ルの^ル糸^ル様^ル 處^ル此^ル

あ^ルな^ルあ^ルい^ルし^ルき^ルあ^ルら^ルい^ルき^ルあ^ルら^ルい^ルき^ル

し^ルら^ルい^ルき^ルあ^ルら^ルい^ルき^ルあ^ルら^ルい^ルき^ルあ^ルら^ルい^ルき^ル

あ^ルな^ルあ^ルい^ルし^ルき^ルあ^ルら^ルい^ルき^ルあ^ルら^ルい^ルき^ル

あ^ルな^ルあ^ルい^ルし^ルき^ルあ^ルら^ルい^ルき^ルあ^ルら^ルい^ルき^ル

あ^ルな^ルあ^ルい^ルし^ルき^ルあ^ルら^ルい^ルき^ルあ^ルら^ルい^ルき^ルあ^ルら^ルい^ルき^ル

いさむかしのぬひのほく一人の縁ふ
何乃お為なるらん 何をり今をほ
むべき親子の契り朽もせぬ花様子よ
口流せよ 様子よ〜 人をたふさうと
見もぬくぬくしむ縁ふ成りて 二年
此日数程あつてわが親の歎かむの

本一の海一のう一を一 ち一が一なる一お
ま一い一あ一 終一い一れた一 様子一れ一を
の一春一を一む一れ一あ一ら一なる一つ一ら一つ一愛一む一れ一逢一時
あ一ら一幸一し一そ一嬉一し一い一海一なる一られ一 形一て
伴一ひ一立一油一つ一〜 母一を一も一助一け一さ一ほ一り一て
仏一果一の一縁一と一成一ふ一も一つ一 二世安樂此縁源

た親子此道ぞあ難き

著者所有



昭和九年五月一日納本
昭和九年五月五日發行



定價金五拾錢

東京市下谷區上根岸町八十二番地

著者 寶生新

東京市京橋區銀座西六丁目三番地

發行兼印刷者 江島伊兵衛

發行所 下掛寶生流謠本刊行會

終

